

ブラソ  
ン  
コ

ブランコを椅子代わりにして少女は座っていた。住宅地のはずれ、雑木林を切り開いた小さな公園。少女は六、七歳くらいだろうか。ベージュのコート、同じ色の帽子、首には白いマフラーを巻いている。

夕方、水銀灯が点き、冷たい風に落ち葉が踊る。寒くないのかな。ブランコを揺らすでもなく、正面を見据えて少女は座り続けていた。声をかけようかと迷いながら、結局私は通り過ぎた。こんな夕方に一人で見据えて。何故か自分のことのような淋しい気持ちになった。

翌日、一層冷たい風が吹いている。今日も少女は座っていた。思い切って近付き声を掛けてみる。

「寒いね」私は隣のブランコに座った。

「うん、少しだけ寒い」少女は答えた。

「こんな日はおうちで遊ぶほうがいいよ」

「おじさん、昨日も前の道を通ったでしょ」

「憶えてるの？」

「だって、みいちゃんを見てたもん。それで、何か言いたそうにしてた」

「すごいな、ちゃんと見てたんだ。君はみいちゃんていうんだね」

「そうだよ。あたしはみいちゃん」

「じゃ、みいちゃんのおうちはどこなの？」

少女は少し考えてから、「あっち」と住宅地のほうを指差した。

「寒いからおうちに帰らない？ 送って行ってあげる」

「いいよ、ここにいる。お母さんがお迎えに来るの」

「もうすぐ来るのかな」

「うん、もうすぐだよ」少女はにこっと笑った。

暗い公園で小さな娘を待たせる母親。どうにも理解できないが、何か事情があるのだろう。

「おじさんはいい人だね」

「いい人かなあ、どうしてわかるの？」

「みいちゃんにはわかるよ。悪い人だったら、あたし逃げちゃうもん。駆けっこ速いから」

「そうだね。逃げて、どこかのおうちに助けてって言えばいいんだ」

しばらく並んで座っていた。

「あのね、おじさん」

「なに？」

「お母さんがお迎えに来るけど、誰かよその人がいると来られないの」

母親は恥ずかしいのかもしれない。あるいは、「子どもをこんな時間まで放っておいて」などと意見されるのが嫌なのかもしれない。

「わかった。それじゃ、おじさんは帰る。でも、もしお母さんが来なかったら、どの家でもいいから入れてもらうんだよ」

「うん、そうする」

母親が来るのを見届けたい気持ちを抑えて、私は公園を離れた。

三日目、やはり少女はブランコに座っていた。私を見て、少し嬉しそうだ。

「こんにちは、みいちゃん」

「こんにちは。あのね、お母さんにおじさんのこと話したら、いい人だねって」

「そうか。ちよつと恥ずかしいけど、ありがとう」

「恥ずかしいの？」

「大人はね、褒められると恥ずかしいんだ」

「ふうん、みいちゃんは褒められたら喜ぶけどな。大人になったら恥ずかしくなるの？」

どう答えたらいいのだろう。

「そうだ、今日はいいものがあるんだ」私はチョコレートを取り出した。「はい、プレゼント」

少女はチョコレートを受け取らず、じつと見ていた。

「食べたいけど、お母さんがチョコは食べちゃダメって」

そういう躰なのだろう。かなりしっかりした母親かもしれない。

「あつ、ごめんね。知らなかったんだ。チョコ食べると虫歯になるしね」

「うん、あたしは食べないから、おじさん、食べちゃっていいよ」

「帰ってから食べようかな。みいちゃんが食べていいもので好きのものはなあに？」

「ええとね、いっぱいある。みいちゃんはお肉が好き。チキンナゲットが食べたい」

「わかった。明日持つてきてあげる」

今日は一段と冷え込んでいる。少女が着ているベージュのコートはかなり厚手だが、それでも寒いのだろう、小さく震えていた。私は見かねて、上着を脱いで少女を包んだ。

「わあ、あつたかい。いいにおいもある。お父さんのおいって、こういうのかな」

「お父さんの服と似てるの？」

「ううん、お父さんの服はないの。お父さんいないから」

聞いてはいけないことを聞いた気がした。

「でもね、みいちゃん大きくなったら、お父さんに会いに行くんだ」

「そうだね、お父さんもきつと待つてるよ」

その日は上着を少女に貸したまま帰った。寒かったが、どうでもよかった。

四日目、昼から雪になった。いくら母親が忙しくても、こんな日に子どもを公園で待たせはしないだろう。しかし私はチキンナゲットを買って公園に向かった。自然と早足になっていた。

ブランコを見渡せる場所まで来て、私は安心した。そして同時に少しだけ悲しくなった。公園に少女の姿はなかった。ブランコには誰も乗っていない。近付くと、雪の積もった踏み板から布のようなものが垂れ下がっていた。私の上着のようだ。母親は返し方がわからなかったのだろう。

上着を取り上げようと手を伸ばしたとき、小さな影が素早く動き、ブランコに飛び乗ってきた。生後三ヶ月ほどの子ネコだ。全身ベージュで、首の周りがマフラーを巻いたように白い。子ネコは私を見て「ミー」と鳴いた。抱き上げると喉をゴロゴロ鳴らし、小さな体を精一杯すり寄せてきた。

脇の茂みから大人のネコが私たちを見つめている。目が合うと、優しい声で「ニャオ」と鳴いた。私にはそれが「お願いします」に聞こえた。

チキンナゲットを母親に残し、私はみいちゃんと一緒に家に帰った。